Latvia

クロージングコンサート ステージの様子
（ラトビア国立文化センター提供）

ステージ上から見た指揮者台と観客席
（筆者撮影）

ラトビア 歌と踊りの祭典2018
クロージングコンサート　レポート

文：堀口大樹（岩手大学准教授）

バルト三国では、国家行事として歌と踊りの祭典が開催されます。今年はラトビア（5年に一度）とリトアニア（4年に一度）の祭典の周期が重なりました。どちらの国も今年は建国100周年ということで、これまでよりも盛大に行われました。周辺の大国に長らく支配されてきたバルト三国では、民族を団結させる力を持つ合唱が特別な意味を持っています。この単なる合唱フェスティバルではない、いわば〝民族の祭典〟に、ラトビア語の合唱曲を専門に歌う日本ラトビア音楽協会合唱団ガイスマは、前回の2013年に続いて2度目となる参加の機会を得ました。今回参加が認められた外国人団体は、当合唱団とエストニアのタルトゥ大学室内合唱団の2団体のみです。

祭典は6月30日から7月8日まで行われ、大小さまざまな合唱、器楽、民族舞踊のコンサートや合唱コンクールが開催されました。最大の目玉は、最終日のクロージングコンサートです。演目は、民謡、愛国的歌、歌謡曲風の合唱曲が中心です。会場は森林公園で行われ、観客は3万人、野外ステージには最大で1万6000人からなる大合唱団が乗ります。各合唱団のパートごとに、ステージ上の何列目が立ち位置なのかがあらかじめ指定されています。スムーズな入場のために、歌い手はステージ袖や裏で50本もの長蛇の列を作って待機します。同じパートで自分たちの前後に並ぶ他の合唱団の方とは、練習から本番までお隣なので、一緒に写真を撮ったり、連絡先を交換したりと仲良くなれます。

クロージングコンサートの全体練習は、本番までの3日間みっちり行われました。どの合唱団も演目は1年半前から練習しているので、全体練習は指揮者による最終的な確認程度です。日よけのない炎天下での練習は過酷そのもの。日中は、半裸になる男性や上半身ビキニ姿の女性もいましたが、夜には一気に冷え込みました。本番前日の夜には観客を動員し、歌い手も本番用の民族衣装に身を包んで、ゲネプロが行われました。

本番は7月8日の20時に開始。緯度が高いので、実際に暗くなり始めたのは22時を過ぎてからです。オーケストラと指揮者合唱団の演奏ののち、混声合唱団と男声合唱団の男性、女声合唱団の女性が先に入場し、男声曲と女声曲を11曲歌いました。男声合唱団は元々数が少ないため、今回は混声合唱団の男性も男声曲を歌うことになりました。その後、混声合唱団の女性が女性合唱団の女性と入れ替わった混声合唱団による演奏、女声合唱団の女性が再び合流した大合唱団による演奏で、計26曲が歌われました。

コンサートは24時過ぎに一旦終了し、その後は往年の歌謡曲などを歌い手も観客も一緒に歌って踊る〝歌い合い〟が明け方まで行われました。帰国便が翌日の（というか当日）の昼だったため、私たちの合唱団はお先に失礼してきましたが、本当は、朝まで歌い踊り明かすことも込みで祭典のクロージングコンサートなのかもしれません。